

個人山行報告

ヨーロッパアルプス回顧録

藤井 諭

1975年に単独でのヨーロッパアルプス登山の記録である。第1回のシャモニー滞在に引き続き、第2回はツェルマット滞在の記録を述べる。シャモニーではモンブラン登頂とグランドジョラス到達を果たし順調だった。しかしツェルマットでは次に述べるように燦々たる結果となった。

第2回 幻のmatterホルンとゴルナー氷河

8月1日（金） 曇

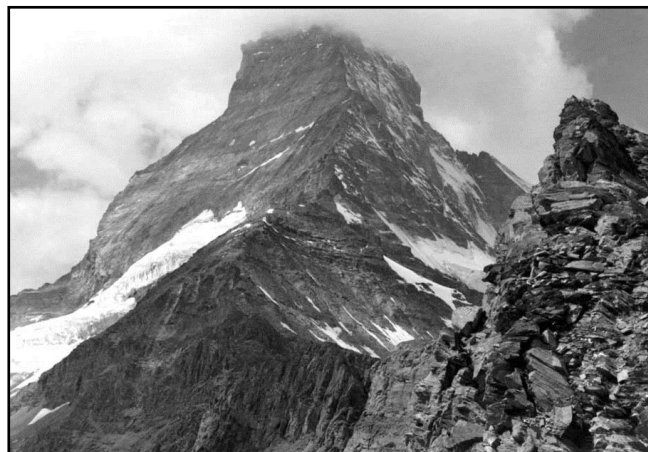
早朝にシャモニーを登山電車で出発、フランスからいよいよスイスへ入る。電車の中では金髪のかわいい子供が、お母さんのハーモニカに合わせて愛らしい声で歌っていた。“お星様ピカリ”のような曲で、さかんにおねだりしてハーモニカをふいてもらい、かわいらしい声で歌い続けていた。Flumet 駅が国境になり、スイス警察の簡単な検問を受ける。スイスに入ったとたん、英語が通じ出す。まず、Martigny 駅の売店でチョコレートを買ったら、きれいな英語が帰ってきたので感激！さすがは観光立国スイスである。

Martigny と Visp でそれぞれ電車を乗り換え、matterホルンの聳えるツェルマットの町へ入る。町の入口にはたくさんの車が駐車していた。町にガソリン車が入ることはできず、町の入口の駐車場で全部止められてしまう。バスなどの大型車はずっと下のセント・ニクラウスでストップ、あとは電車で町へ入ることになる。

電車を降りて、まずはキャンプ場へ行きテントを張り、これからの宿を確保する。ツェルマットはシャモニーと比べると小さい町で、キャンプ場の設備も大分劣った。しかしここではレストラン、キャンプ場の管理室、土産物屋、登山電車の切符売り場等、どこへ行っても英語が通じる。したがってシャモニーのようにフランス語しか通じなくて、困りきって観光協会へ逃げ込むこともなくてすんだ。

町中は電気自動車と馬車で公害はないが、フン害があり臭かった。ちょうどこの日はスイス建国記念日にあたり、町をあげてのお祭りがあった。まず牧場から降りた山羊の群れが、カランコロンと鈴の音を鳴らしながら街中を賑やかにパレードした。両側が見物客でいっぱいの大通りを山羊の列は延々と続いた。

夕方になると街の広場で、まずミリタリーバンドのブラスバンドを先頭に、パレードから始まる。花火が上がり、仏、独、英のアナウンスで始まる。最初と最後だけ日本語のアナウンスがあったのは笑いだった。ブラスバンドのスイス国家演奏、ヨーデル、少年少女のコーラス、アルプホルンの三重奏、民族衣装をまとってのフォークダンス、そしてスイス旗の旗舞と続く。さらに種々の花火と山の上からの赤、青のイルミネーションが美しい。何ととっても、本場のヨーデルとアルプホルンの生演奏を聞いたのには感激した。



matterホルンへの道

8月2日(土) 晴時々曇

前日はお祭りで夜が遅かったので、この日はゆっくりマッターホルンの偵察に出かけることにした。まずキャンプ場から町外れまで歩いてロープウェイに乗る。上ると共にツェルマットの町が眼下に美しく広がる。フリーで一旦乗り換え、終点のシュワルツゼーへ到着する。広いテラスにすわり、コーヒーを飲みながらしばらく雄大な眺めを味わった。ここからの眺めは圧倒的だ。間近にマッターホルンが大きくそびえる(上写真)。東にはゴルナー氷河の奥にモンテローザとリスカムが並び、その右にはブライトホルンと、4000m 峰が立ち並んでいる。登山道を2時間歩いて11:30にヘルンリ小屋へ到着。ここからマッターホルンの登攀が始まる地点だ。ヘルンリ稜の平均傾度は40度だが、見た目にはさらに急である。それが一気に1200mの高度差でそびえているのだから、ちょっととまどってしまう。

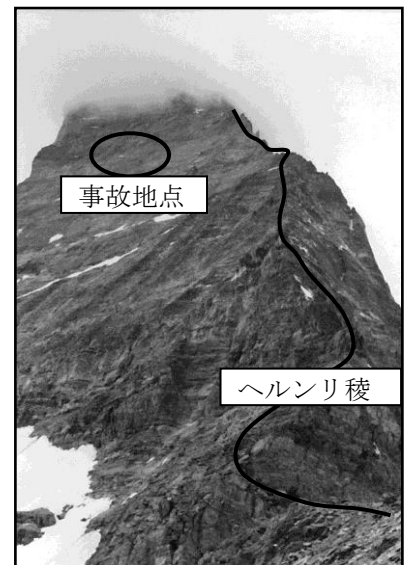
折しもスイスの救助隊のヘリコプターが轟音とともに、ヘルンリ小屋へ降りてきた。ミニタリールックの隊長が突然私のところへ来た。そして東壁を指差し「日本人3人パーティが遭難しているが、彼らのNameとPlanを知らないか？」との質問。同じ日本人だからと言って私が知るわけがない。隊長の言うには、3人パーティのうちの1人は昨夜のビバーク中に凍死した模様で、今からヘリコプターで降ろすとのこと。あとの2人は生きていらしい

(右写真)。再びヘリコプターは飛び、ものの10分も経たないうちに死亡した1人をさかさ中吊りで、生きている2人は中に載せて下の町に運んで行った。

登山者の話では、3日前にはイギリス人がヘルンリ稜で墜落して死んだそうだ。居合わせた人の話によると、大きな悲鳴が聞こえたとのこと。

そんなこんなでゴタゴタして気味が悪くなり戦意喪失、この山を登る気がしなくなってしまう。毎年OMCの剣沢定着で岩登りは続けてきたが、日本の岩山とはスケールが異なる。ガイドを雇えば登れるだろうが、私にとってはガイド料は今の給料1か月分と高価である。猿回しのように連れられて登る登山は性に合わない。町で知り合って俄かパーティを組んで登った日本人同士もいたが、予想以上に時間が掛かりヘッドランプで疲れきって下山したとのこと。そこまでして登って喜ぶかどうか疑問に思った。今回は単独行の私にとって縁のない山と考え、この山の登山はやめることにした。

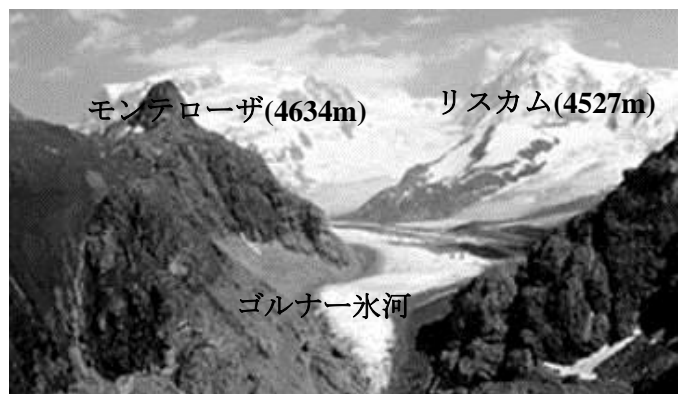
ヘルンリ小屋に着いてからあれこれ3時間も経っていた。登らないと決めればもうこの山に用はないので、下山しシュワルツゼーに戻った。頭を切り替えて、明日はブライトホルンとモンテローザの間にあるゴルナー氷河を歩くことに決めた。



ヘルンリ稜と事故地点

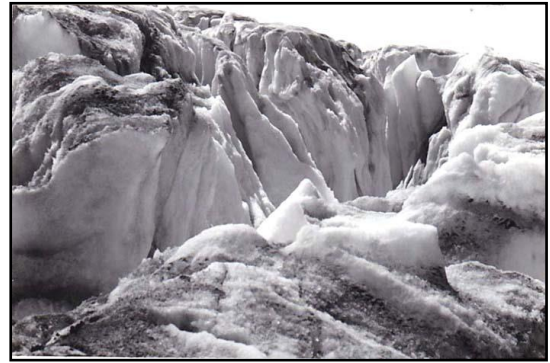
8月3日(月) 晴時々曇

朝一番の登山電車で右手に天を指すマッターホルンを眺めながらゴルナーグラートへ向かう。標高差1500mを45分で一気に登る。終点で降りると、正面にブライトホルンが荒々しくそびえる。アルプス第2の氷河、ゴルナー氷河の奥には雪で白いリスカムがある。そしてその左に



ゴルナー氷河の奥にモンテローザとリスカム

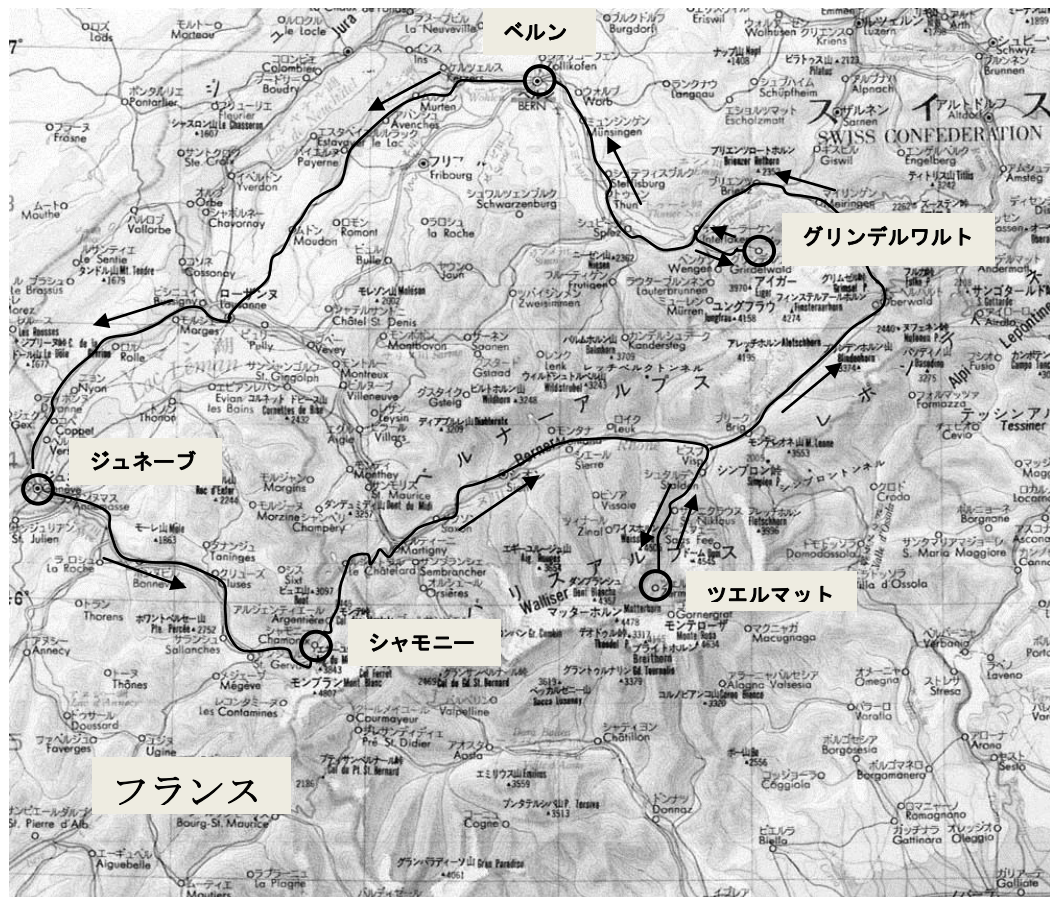
アルプス第2の高峰モンテローザがある（右写真）。急坂を下ってゴルナー氷河へ降りて、アイゼンをつけて歩き始める。氷河は氷が剥き出して、ザラザラで滑らないので歩きやすい。だんだんと氷河の表面は雪におおわれ、ギャップの狭くなったところを選び、前をピッケルで確認しながら慎重に登る（下写真）。広大なゴルナー氷河を横切りリスカムに向かってまっすぐ進む。モンテローザヒュッテは右岸の崖の上に見える。ヒドンクレバス（隠れて見えないクレバス）らしきものが現れ、ピッケルを使って慎重に進む。リスカムがだんだん大きくなって来たところで、上からアンザイレンで降りてきたスイス人4人のパーティと出会い、呼び止められる。そして、この上部はヒドンクレバスが多く、一人では危険だから引き返すよう警告された。忠告に従い彼らと行動を共にし、元来たルートでゴルナーグラートまで戻った。



ゴルナー氷河のクレバス

時間が余ったので、ツェルマットにある山岳博物館を見学することにした。ウィンパー著「アルプス登攀記」は面白い本で、出発前に何度も読んで来た。そのウィンパーの使った本物のピッケルをここで見る事ができた。教会の近くには、マッターホルンに初登頂し、下山途中で遭難死した名ガイドのミッシェル・クロの墓があった。

マッターホルンの登頂をやめたのであれば、これ以上ツェルマットに留まる必要はない。それよりは、早くアイガーの聳えるベルナーオーバーラント三山を見たい、との気持ちが強くなった。明日はアイガーの麓のグリンデルワルトへ行こう！とに決めた。（つづく）



ヨーロッパアルプス訪問地ルート図